

題名に惹かれて、葛城奈海氏の最新作「戦うことは「悪」ですか」(扶桑社 2021/6/10 発行 1,540円)を図書館から借用して一気に読み終えた。“男はいないのか?”以外については同意だ。小生等の思いを代弁して呉れた。有り難いことだ。



## 1 本書の構成

はじめに

・「八紘為宇」という建国の理念 ・戦ってでも守りたいものは、ないですか?

第1章 尖閣諸島を守る

第2章 拉致被害者奪還

第3章 先人たちの慰霊・顕彰、そして思いの継承

第4章 皇統を守る

第5章 自衛他のあるべき姿とは

第6章 一木一草にも神が宿るといふ自然観の継承

第7章 麻あって日本あり一大麻の真実

第8章 古事記の時代から続く日本の捕鯨

おわりに 日本人の使命

帯に曰く「取り戻すものは何か ・3.5mの荒海を11時間、尖閣諸島海域渡航15回で見た現実 ・拉致被害者役になって実感したこと ・予備自衛官補になって驚いたこと ・部下を死地に送る自衛官は何を感じたか ・米作りを通して実感した国を守るということの本質 ・「柱」の主は誰か? 宮大工の棟梁が教えてくれたこと ・日本版SDGs「常若」の思想を世界へ ・古事記の時代から続く日本人の捕鯨とその文化とは 他」

## 2 一部紹介

“おわりに”の一部を抜粋して紹介する。氏の本書執筆の動機・思いが明確に伝わってくる。(同書217~218p)

『尖閣、拉致、教科書、皇統、大麻、捕鯨……どれもこれも問題の本質を辿っていくと、結局「戦後体制」に行きつきます。戦後、アメリカを中心とする戦勝国によって日本に仕掛けられた時限爆弾が、ひたひたと威力を発揮し、日本を骨抜きにしました。「敵ながら天晴れ」と言いたくなるような見事さです。

もともと島国で和を尊び、人を疑うことをよしとしない素直な国民性という土壌があり、そこに教育とマスメディアというGHQの仕掛けた二大洗脳ツールが、効果的に日本人の「精神的武装解除」を行ってきました。世界「マスコミ信じるランキング」で、日本は「ぶっちぎりの一位」だそうです。現場を体験して、それをどうマスメディアが報じたかを見れば、公正な報道を望むことがいかに困難か、すぐに実感できます。しかしながら、現場を体験するという事はなかなかできるものではないことも事実です。

そうやって、教育とマスメディアが作り上げた幻想は無限にあります。象徴的な存在のひとつは、国連かもしれません。「平和の殿堂」のような印象を抱いている日本人が多い気がしますが、その実、英語の名前、the United Nationsを見れば明らかなように、もともとは第二次世界大戦で日本が戦った戦勝国連合です。それを思えば、本書で紹介した国連女子差別撤廃委員会が皇位継承に関していちゃもんをつけてきたり、

国連人間環境会議で日本の捕鯨がやり玉に上がったりすることも、なるほどと思わざるを得ません。日本を貶め、弱体化させようとするプロパガンダは現在進行中です。こうした幻想から目覚めなければ、日本は日本でなくなってしまう。日本人が目覚めるのが早いか、日本が日本でなくなるのが先か、今、その瀬戸際に来ているように思えてなりません。本書の中で、私は「日本に男はいないのか？」と挑発的な言葉を吐きました。不愉快な思いをされた方がいらしたら申し訳なくと思いますが、私の抱く危機感の表れだにご寛容頂ければ幸いです。』

### 3 葛城奈海氏の略歴（同書から）

ジャーナリスト・俳優。防人と歩む会会長。やおよろずの森代表。

東京大学農学部卒業後、自然環境問題・安全保障問題に取り組み、森づくり、米づくり、漁業活動等の現場体験をもとにメッセージを発信。TBS ラジオ『ちよつと森林のはなし』森の案内人(2008年～2011年)。2011年から尖閣諸島海域に漁船で15回渡り、現場の実態をレポート。防衛省オピニオンリーダー。予備3等陸曹。予備役ブルーリボンの会幹事長。北朝鮮向け短波放送「しおかぜ」でアナウンスを担当。日本文化チャンネル桜『Front Jttan 桜』レギュラー出演中。産経新聞『直球&曲球』連載中。共著に『国防女子が行く』（ビジネス社）、『大東亜戦争失われた真実』（ハート出版）、解説書に『[復刻版]初等科國語[中学年版]』（ハート出版）がある。

### 4 若干のコメント

- (1) うら若き女性の行動力（尖閣海域渡航15回、予備自衛官補応募、各種会の会長等歴任、アナウンス担任、新聞にコラム連載、精力的な執筆活動等）に感嘆する。彼女に続く者の出でんことを願う。
- (2) 確かに一見最近の若い男性は、草食系と云われるが如くに柔くなったような気がするが、日本古来の大和男のDNAは脈々と継承されている筈だと信じている。それすらも信じられなくなったら、日本も終わりだ。